

去年亡せし母を憶ひて

著者	高木, 市之助
雑誌名	龍南會雜誌
巻	160
ページ	103-104
発行年	1916-03-28
その他の言語のタイトル	去年亡せし母を憶いて
URL	http://hdl.handle.net/2298/6577

去年亡せし母を憶ひて

教授 高木市之助

わが杖の銀の装具まといに夕日する頃は野に出で母をしぞおもふ。
たそがれのこゝろの海へなごやかに母こそ浮べ白鳥のごと。
わがためなの父の怒にわれよりもまづ泣き給ふ母なりしかな。
琴ひけば汝なを知らざりしそのかみを憶ふと宣らす母は亡せにけり。
ふるさとに家はあれども櫻咲く島のいづこに母の生きたる。
俣まよりおどり下るれば木魚ねの音もくもくもくもく流れ居しかな。(以下三首當時を憶びて)
ろうそくの灯影をうけてちらくど水にそぼちし乳色の頬。
水注ぐそれは何事くされたる柳落葉の黒きくちびる。
雛僧は墓地の小路ゆにこやかに口笛吹きぬわれは母をおもふ。(以下四首歸省して)
この墓をあばかば今も我母は白き頭巾をかむりておはさむ。
新しき石牌をほめて二三人父にも云ふふるさとの墓。
墓男をかしき男死にて來る人のすべてを埋むる男。
南みなみの島に來れどもわが持たる金の指輪はつめたきものか。
蛇へびか母のすがたを十重二十重まけるころに白雪が散る。

おぼろ月窓にさし來ぬ反魂の香を焚かせていざ眠らまし。

—、五、一、二、日記より、—

長谷川教授の廿年勤續祝賀會に際して

茂 森 白 影

長々谷川の水おやみなし君がはたとせまた遠きかな。
はたとせの流れあつめて谷川やゆくての海に浪光りあり。
たねまなきいさほしこめて龍田山樹々の翠も深まさりけむ。

復活の日に

有 田 俠 花

目にみねぬ心のおさめ怠りつ悲しき事の數つくりけり。
うつろなる心は永久にうつろなれば我なまじよ生をうけまじ。
只一つの光あらなし我が心物たらざれば悲しみのわく。
いひしれぬうれひ覺ねぬ此の日頃めに見ぬ心の凹み見いでつ。
ふと氣づく心の傷によごとひごと自らがうつつちは重しな。
みづからがうちひらくべき新らしき道ふむ朝の光りうれしも。
いにしへの美しきさがにあこがれの日のみつけば心狂ほし。